

## 第一次朝鮮出兵事件について (四)

檜 山 幸 夫

### 目 次

- 序
- 一、大島公使宛訓令 (以上、『中京法学』第二〇卷第三号掲載)
- 二、派遣経費問題 (以上、『中京法学』第二〇卷第四号掲載)
- 三、出兵兵員数問題 (以上、『中京法学』第二二卷第一号掲載)
- 四、派遣軍受入れ準備
- 結 (以上、本号掲載)

### 四、派遣軍受入れ準備

六月六日西郷海相より出された、京城に派遣する海軍陸戦隊の受入れ準備の依頼に対して、陸奥外相は直ちにその実務を遂行すべく在京城・仁川の外務省出先機関へ指令を発するとともに、その旨を親展送第二九号によって西郷海

相へ回答した。

(註1) 明治廿七年六月六日起草

(註2) 敬義

(註3) 同く年々月々日発遣

(註4) 主任

(註5) 次官

(註6) 政務局長 慎

(註8) 親展

海軍大臣伯爵西郷從道殿

外務大臣陸奥宗光

号九二第送親展(註7) 印

在仁川碇泊帝國軍艦ノ乗員我人民保護ノ為メ上陸致シ候節人家数軒借受ラレ度ニ付其機ニ及ヒ不都合無之様可  
取計旨前以テ其筋ヘ訓令方御依頼之趣領承致し右ハ其筋ヘ訓達可致候得共借家等モ少キ場所柄ニテ且ツ兵員モ  
多人数之儀ニ候ヘハ総テ不都合無之〔儀ハ〕(トハ)(註9)保証致兼候此段回答旁申進候也

(1)

(註1) 野紙に印刷、年月日のみ黒墨筆。

(註2) 秘書課長中田敬義の黒筆による自署。

(註3) 前(註1)と同じ。

(註4) 罫線と同じ印刷。

(註5) 上欄外に押印したもので、「次官」と林董と刻られた外務次官林董の朱印。

(註6) 「政務局長」は朱印、「慎」は政務局長栗野慎一郎の朱筆による自署。

(註7) 上欄外に朱で押印したもののだが、番号数字は黒墨筆。

(註8) 朱印。

(註9) 元字「儀ハ」を朱丸にて抹消し、右行外に朱筆した「トハ」に訂正した。

陸奥外相は西郷海相に対して、海軍省より要請された海軍陸戦隊の宿舍用として京城での人家借受取計方依頼を基  
本的には了承したが、何分借家等が少ないことから「兵員モ多人数之儀ニ候ヘハ総テ不都合無之トハ保証致兼候」と、  
準備取扱方に条件を付した回答書を返送している。陸奥外相からすれば、元々海軍側の依頼が「仁川碇泊帝国軍艦ノ  
乗員」というように漠然とした人員数しか示していなかったこと、「我人民保護」という派遣目的からその守備範囲  
を含めて不確定的なものであったこと、海軍陸戦隊の将兵の宿舍に対して「人家数軒借受ラレ度」と露営ではなく借  
家を求めていたこと、受入れ準備に遺漏がないように事前に京城の日本公使館・領事館へ訓令を発すること、であっ  
たことから、その準備期間があまりに短かすぎることもあって、海軍の依頼を承諾しつつも充分なる受入れ体制が整  
えきれない旨を返答せざるを得なかったのであろう。とはいえ、現地京城において海軍陸戦隊を受入れさせなければ  
ならなかった外務省は、西郷海相の「前以テ其筋ヘ訓令方」の依頼に従い、陸奥外相の名をもって杉村臨時代理公使  
に次の電訓を発したのである。

Sugimura,

Seoul.

(161) Make accommodation for 20 policemen. It will be necessary also to find accommodation for 300 marines; but you will act with caution as the notice of dispatch of troops is not yet given to Chinese Government. Proper expenses for this will be appropriated.

Mutsu.

Sent. June 6<sup>th</sup> 1894.

(2)

杉村臨時代理公使は、既に前日の六月五日に陸奥外相より大島公使に帯同する護衛は、巡查二〇名と海兵約三〇〇名であると伝えられていたこともあり、この電訓の指示に従い該人員の宿舎を用意すべく準備を開始することとなる。宿舎となる借家を探すとすると、まずその経費が必要となるが、杉村は六月八日海兵受入れにかかわる準備経費の支弁について陸奥外相へ「Remit by telegraph 5,000 yen for Making accommodation of marines」と、海兵の宿舎借用費用として五、〇〇〇円を電信為替にて送金するように求めた電報を発している。この電報は、六月八日午前一〇時四〇分に京城で発したものが、外務省が「電受第二一〇号」として接受したのは翌九日午前一時一七分であった。この杉村電報が外務省に達した後の夜、能勢仁川領事より八重山艦が着仁した旨が電受された。<sup>(3)</sup> 能勢の電報は九日の午後二時四〇分に発せられたのだが、外務省が接受したのは同じ午後九時三〇分であった。外務省は、直ちにその準備体制を整えるべく海兵宿舎借用資金支弁について、海軍省へ照会することとなる。海軍側の対応の遅れはここでも露わになっていた。

送第三十一号

急<sup>(註1)</sup>

次官<sup>(註3)</sup>

印

明治<sup>(註2)</sup> 年 月 日起草  
同 廿七年六月九日発遣

主任

大臣<sup>(註4)</sup> 光

政務局<sup>(註5)</sup> 敬義

西郷海軍大臣

陸奥外務大臣

海兵宿所用意ノ為メ電信為替ニテ金五千円送附相成度旨本日在京城杉村臨時代理公使ヨリ電報有之候ニ付而ハ送金方至急御取計有之度將又同代理公使江電答ノ都合有之候間何分宜敷折返シ御回答相成度候也

(註1) 上欄外に朱印。

(註2) 年月日のみ黒墨筆。

(註3) 上欄外に押印されたもので、「次官」「林董」とも朱印。

(註4) 「大臣」の朱印に、黒鉛筆にて「光」と記した陸奥宗光の自署。

(註5) 「政務局」の朱印と、黒墨筆にて「敬義」と記した中田の自署。

(註6) 上欄外に朱印。但し番号数字のみ黒墨筆。

杉村の要請に応じた外務省は、早速海軍省へ派遣軍受入れの為の準備資金の要請を行ったが、大鳥公使の一行は既に仁川に着港し、派遣軍の編成が完了し、まもなく京城へ向けて進発することが予想されていた。かかる緊急的情况

のなかで、この陸奥外相の五、〇〇〇円電信為替にての至急送金方要請に対して、即日西郷海相から次の回答が寄せられた。

(註1)  
主管 政務局

(註2) 訂  
廿七年六月「十」(九)日接受

(註3) 不明  
官印第一五三四号

(註4) 印

刑(註5)  
〔大臣〕

(註6)  
次官

印

親展送第三一号ヲ以テ海兵宿所用意ノ為メ金五千円杉村臨時代理公使ヘ送金方ノ件御照会之趣了承右ハ杉村代理公使ヲ現金前渡官吏トシ同人ヘ宛即時電信為換ヲ以テ金五千円送金可取計候右及御答候也

明治二十七年六月九日

海軍大臣伯爵西郷従道 印(註8)

外務大臣陸奥宗光殿

機密  
号三五七第受

(註1) 右欄外に朱印。

(註2) 右欄外に朱印。但し、日付の「十」は黒墨筆にて抹消され、右横にこの墨にて記された「九」に訂正された。この日付訂正は、外務省の一般業務終了後に海軍大臣の回答書が寄せられてきたことを示すものとみられる。

(註3) 朱印。但し、番号数字のみ黒墨筆。

(註4) 「栗野慎一郎」と刻られた政務局長の朱印。

(註5) 上欄外に朱印。但し、朱線にて削除されている。

(註6) 上欄外に朱印。

(註7) 上欄外に朱印。但し、番号数字のみ黒墨筆。

(註8) 「海軍大臣之印」と刻られた朱印。

海軍省は、海兵宿泊所用意のための経費を直ちに杉村臨時代理公使に送金するとともに、同人を現金前渡官吏とする旨を伝えてきたのである。ここに、必要経費が直ちに電信為替にて送金されとともに杉村が出納官吏となつてその経費の取扱い責任者として全ての準備を取計うことになったことから、外務省は早速その旨を同日杉村に電送第一七九号信をもって電訓したが、その際に「The marine force is (to) remain at 平城<sup>4</sup> for only a few days」<sup>(7)</sup>をつけ加えていた。文中の「平城」は「京城」の誤記であらう。

この電訓の後、更に同九日陸奥外相は電送第一八〇号信をもって杉村臨時代理公使に「Telegraphic [exchange] (draft) of 5,000 yen from 海軍省<sup>8</sup> will be paid you by 第一国立銀行<sup>(8)</sup>仁川」とする電訓を發し、いかに経費の処置は六月九日中にか全てが完了することとなる。

だが、右の外務省・海軍省・在京城日本公使館での通信が続けられている際中、前述のように同九日午後九時三〇分能勢仁川領事より大島公使が乗船した八重山艦が仁川港に着港した旨を伝える電報が接受されていたことから、海軍省も外務省も当初の計画通り仁川港に集結していた海軍艦艇より陸戦隊が編成され、京城へ向けて進軍する準備が開始されていたと予想していた筈である。総じて、第一次出兵における海軍の対応は遅滞しがちであったが、この京城での派遣軍受入れに際してもその処置の遅れは受入れを準備する側にも大きな影響を及ぼすこととなる。それは、前述のように本国よりの指示を受けてから実際の陸戦隊着京の期間が極端に短かったという時間的問題と、本国より伝えられた派遣人員数が実際の人員よりもかなり少ないものであったという情報の不正確さの問題、更に準備経

費の支弁にみられる実務的處理の遅れの問題にあった。派遣軍を受入れる側となる京城の日本公使館や仁川の日本領事館にとって、在留期間が如何に少ない予定であったとはいへ、海兵の後に混成旅団の派遣が控えているということ  
を考慮しなければならず、多くの兵員の受入れ準備は容易なものではなかった。

海軍は、仁川港に到着していた松島・千代田・赤城・筑紫・大和と、兵員を増員してきた八重山の六艦より陸戦隊  
を編成することとなるが、八重山を除く五艦より「將校以下四百二十名ヲ拔キ之ニ野砲四門ヲ附シテ一ノ陸戦隊兵、少佐岡山」<sup>(9)</sup>を編成したものである。この第一次出兵軍については、參謀本部が編纂した『明治廿七八年日清戦史』には詳細  
な記載がないので、該書からは細部についてはっきりしたことがわからない。伊東常備艦隊司令長官の命令によつて、この五艦より陸戦隊が編成されるが、その艦艇の能力は第2表の通りである。<sup>(10)</sup>

艦名	所管	噸數	艦種	乘員定員	進水年月
松島	佐世保鎮守府所管	四、二七八噸	海防	四〇一名(内砲員三〇名)	明治三三年一月
千代田	佐世保鎮守府所管	二、四三九噸	鋼甲帶巡洋	三〇六名(内砲員二七名)	明治三三年六月
赤城	吳鎮守府所管	六二二噸	砲艦	一二六名(内砲員一〇名)	明治二一年八月
筑紫	吳鎮守府所管	一、三七二噸	巡洋	一七七名(内砲員二一名)	明治一三年
大和	吳鎮守府所管	一、五〇二噸	スループ	二二九名(内砲員一四名)	明治一八年五月
八重山	横須賀鎮守府所管	一、六〇九噸	報知	一二六名(内砲員二一名)	明治二二年三月

五艦の総乗員は一、二三九名で、その内の九二名が砲員であった。このなかから四二〇名の人員を割いて陸戦隊を編制したということは、総乗員数（但し、定員数総計）の三三・九%の将兵を割いたことになり、その編制にはかな



りの無理があつたものとみられる。

この編制の対象となつた艦艇は、常備艦隊旗艦である松島が福州馬祖島から六月六日釜山港に入港し、千代田も福州馬尾港から松島と同じく同日釜山港に入港していた。また、赤城は芝罘港にあり、大和と筑紫は夏期航海のために游弋中偶々仁川港に入港していたものであつた。<sup>(11)</sup>つまり、これらの艦艇は朝鮮出兵事件発生に際しては何んらの準備を整えることなく、この第一次出兵に参加することとなつたのである。日本海軍の常備艦隊は、横須賀鎮守府所管の高雄（巡洋艦・一、七七八噸・一五節・定員二六六人・明治二十一年一〇月進水）と武蔵（スループ艦・一五〇二噸・一三節・定員二三〇人・明治十九年三月進水）、呉鎮守府所管の千代田・大和・筑紫・赤城、佐世保鎮守府所管の松島・高千穂（巡洋艦・三七〇九噸・一八節・定員三三七人・明治一八年四月進水）の計八艦<sup>(12)</sup>であつたが、その内の高雄は六月七日に釜山港に入港した後、軍令により陸兵の輸送船護衛の任をうけて門司港に回航中であり、高千穂は布哇国に夏季航海中であつたことから、日本国内にあつたものは僅か横須賀軍港に碇泊していた武蔵の一艦にすぎなかつた。<sup>(13)</sup>

日本海軍の総戦力は、軍艦が二八隻で五七、六三一噸、水雷艇が二四隻の一、四七五噸で、合計五九、一〇六噸にすぎず<sup>(14)</sup>（但し、この他に風帆艦の満珠・干珠・館山の三艦があつた）、戦力不足を補うために日本郵船会社所有の山城丸（鉄・二、五二八噸・一二節で、搭載兵器は八〇年式三〇口径一七吋克砲・旧式一二吋安砲と一吋諾砲、武装完了は明治二十七年七月一九日）・近江丸（鉄・二、四七三噸・一二節、八〇年式三〇口径一七吋克砲・一二吋安砲・一吋安砲、同七月二三日）・西京丸（鋼・二、九一三噸・一二節、一二吋速射砲・五七ミリと四七ミリ速射砲、同八月二二日）・相模丸（鉄・一、八八五噸・一〇節、八〇年前式一二吋克砲・七吋半克砲・四七ミリ速射砲、同九月九日）の四隻の商船を代用軍艦とするといった状態であつた。<sup>(15)</sup>軍艦総数に占める常備艦隊の割合は、軍艦総隻数（但し、水雷艇と風帆艦・代用軍艦を除く）二八隻中八隻の二八・六％、総噸数（同上）中では五七、六三一噸に比して一七、二

○二噸の二九・八%であり、そのなかで朝鮮出兵事件発生当時国内にあった艦船が一、五〇二噸のスループ艦武蔵一隻にすぎなかった。このことは、海軍の朝鮮出兵事件への対応の遅れの一つの要因となっていたことを示すものともいえよう。それは、常備艦隊中のほとんどの艦艇が夏期航海中であつたこととも合せて、仁川集結の各艦には通常訓練用以外の増員はなされていなかったことを意味している。そこから三三・九%の人員を割いて陸戦隊を編成して上陸させたということは、この陸戦隊を長期間京城に滞留させることができないということ、少くともこの段階に限定したならば清国軍との交戦は予想していなかったことが考えられよう。前者が、後日の混成旅団先遣隊との交代にかかわる問題として、後者が対清戦略とのかかわりの問題において留意すべきであろう。

前者について、伊東常備艦隊司令長官は陸戦隊に「陸軍々隊到着ノ上ハ交代シテ帰艦スヘキ任務ヲ与ヘ」ており、陸軍の入京を阻止せんがために大島公使が派遣した渡辺鉄太郎砲兵大尉（駐韓公使館附武官）と混成旅団先遣隊参謀長岡外史歩兵少佐との交渉における上原少佐の間合せに対しても「海軍兵ハ一刻モ猶予不相成<sup>(17)</sup>」として陸軍兵との交代を求めていた。海軍側からすれば、仁川に碇泊させたままの艦艇を残して、長期間三四%近い兵員を割いて京城に残留させておくことは、軍事的にも到底不可能であつた。海兵と陸兵との交代問題は、外交政策上不得策とする大島公使の主張と、「若シ此俟仁川ニ来着シ上陸スルヲモ能ハスシテ空シク帰朝セシトアリテハ帝国将来ノ外交ノ為メ内治ノ為メ果シテ如何ナル悲境ニ陥ルカ知ル可ラス日本帝国ノ参謀本部ノ名譽ト軍隊ノ名譽ハ地ニ墮ルモ知ル可ラス<sup>(18)</sup>」とする長岡参謀等の主張との対立はあるものの、海兵そのものの京城残留だけは早急に解決しなければならなかつた。

後者では、六月四日以降清国軍の動向に関する情報がかなりの量で入手されるなか、六月九日に發電された清国軍一、〇〇〇名が牙山に到着した旨を伝える杉村電報<sup>(19)</sup>・能勢電報<sup>(20)</sup>が外務省に入電しており、在天津神尾少佐よりも傍受

した清国側の動静を伝える電報<sup>(22)</sup>が、その後の動向を伝える能勢電報<sup>(23)</sup>、在北京独公使よりの清国軍に関する小村電報<sup>(24)</sup>等多くの情報が伝えられていた。日本側が朝鮮の農民叛乱の状況よりも清国の動静にかなり神経質的に対応していたことは、当然にして清国との軍事衝突を想定していたことを示すものではあったが、伝えられてきた清国軍の情報からも、又、派遣された海軍及び混成旅団先遣隊からも火急を告げるものはなかった。更に、渡辺大尉と長岡参謀との交渉においても、京城・仁川とも平穩であるとの共通認識のもとで、派遣されて来た軍隊をどのように処置すべきかに議論が集中していたのであった。彼らの討議のなかからは、清国軍との交戦を想定した上での搭乗員の割愛による艦隊運動の不利を主張したものや、陸軍兵力に対して大幅に戦力的に劣勢となる陸戦隊の問題が話題となっていることも見ることができない。そこでは、派遣された混成旅団をそのまま帰国させることは「参謀本部ノ名譽ト軍隊ノ名譽」のために反対であるとした、独善論的な軍の論理がみられるだけであつた。それは、まだこの時点では清国軍との交戦が具体的計画・想定とはなっていないことを示したものであるといえよう。それであるが故に、仁川碇泊艦艇から乗員を大幅に割いて陸戦隊を編成し、艦より遙かに離れた京城まで進撃させたのではなからうか。

六月九日午後仁川に到着した大鳥公使は、杉村臨時代理公使から「翌早朝兵ヲ引イテ出発入京セラレントヲ報告<sup>(25)</sup>」されたこともあり、着仁後直ちに京城へ向うことを止め仁川に留まることとなる。翌一〇日早朝、巡查二〇名と海兵四八八名を率いた大鳥公使は、「午前五時仁川を発し、公使は輿に駕し、本野参事官は馬に跨り、警視庁の巡查之を護衛し、海軍陸戦隊員は前後を擁して進<sup>(26)</sup>」んだとされている。「首力ハ午後七時三十分京城ニ入<sup>(27)</sup>」ったが、大鳥公使の一行を迎えた杉村臨時代理公使は、翌二一日午前九時一五分発の電報にて陸奥外相へ「大鳥公使ハ海兵四百二十名巡查二十名ヲ率ヒ六月十日午後七時三十分当地ニ着セリ<sup>(28)</sup>」と報告してきている。

派遣軍は主力を入京させるとともに、一小隊三〇名を九峴山に分駐させていた<sup>(29)</sup>。この派遣軍の部署は、次の通りで

第一次朝鮮出兵事件について(四)

あったという。

総指揮官兼大隊長	海軍少佐	向山 慎吉
艦隊参謀	海軍大尉	嶋村 速雄
大隊副官	同	中川 藤次郎
参謀	同	井上 保
中隊長	同	谷 雅四郎
同	同	仙頭 武央
同(野砲)	同	名和又八郎
軍医長	海軍大軍医	草野 復人
主計長	海軍大主計	平井七三郎
小隊長	海軍少尉	布目 満造
同	同	小黒 秀夫
同(野砲)	同	兼子 昱
同	同	奥田 貞吉
同(野砲)	同	伊東満嘉記
同(野砲)	同	若林 欽
同	同	吉田増次郎
鍬兵司令	同	川原袈裟太郎

説 論

小隊長	海軍少尉	藤木 定吉
	海軍少軍医	宮川 兵市
	同	根来 祐春
	海軍少主計	金井茂太郎
	同	小池越太郎
	海軍少尉候補生	田中芳三郎
野砲隊附	同	平塚 保
中隊附	同	押村 庸茂
信号掛	同	湯浅竹次郎
伝令	同	田中 安吉
同	同	三橋吉次郎

(30)

京城に入った海軍兵の実数ははっきりしないが、最大で四五八名程度であるとして、陸奥外相が伝えてきた三〇〇余名よりもかなり大幅な増員数であるといえる。派遣軍は、京城内の旅宿市川に本部を置き他の将兵を各戸に分宿させていることからも、その受入れはかなり困難なものであった。この事情について在京城二等領事内田定槌は、六月一三日付で林董外務次官に次のように報告している。

(金三)  
通商局 印

次官<sup>(註7)</sup>  
印

廿七年六月廿一日接受<sup>(註1)</sup> 主管<sup>(註2)</sup> 政務局 慎<sup>(註4)</sup>  
公信第七〇号<sup>(註5)</sup>

受第七五八六号<sup>(註6)</sup>

海兵入京及ヒ出発ノ件ニ付具報

此度海兵三百名計仁川ヨリ上陸入京スヘキニ付予シメ適當ノ旅宿ヲ定メ大凡ソ三ヶ月間計滞在ノ見積リヲ以テ食品其他雜器具等準備可致旨本月七日ヲ以テ駐京杉村臨時代理公使ヨリ御申聞候ニ付早速以上ノ準備ニ取掛ラントシタルモ兵員入京ノ期日確定セサルニ先チ予シメ公然発表致候儀者或ハ障礙<sup>(碍)</sup>ヲ来スモアラント存候ニ付可成居留民ヲ騒カシメサルヲ注意ノ上食器等ハ暗ニ其向ノ者ニ申付旅宿等ノ儀者只一名ノ計画ノミニ止メ置候処翌々日即チ九日午後八時頃ニ至リ明日午前四時海兵三百大鳥公使ヲ護衛陸戰入京ノ旨仁川ヨリ電報有之候ニ付直チニ当居留民惣代等其他二三ノ重ナル居留人及居留地消防組人足共ヲ集メテ夫々宿所及其他ノ諸準備ニ取掛リ翌十日ノ払曉ヨリ当館警部巡查ヲ麻浦龍山ニ派シ渡船場通過ノ準備ヲナサシメ候ニ付今日午後一時頃迄ニハ悉皆整頓致候然ルニ午後二時半頃ニ至リ先發士官已ニ着京シ水路ヨリ龍山ニ上陸セシ一隊ハ野戰砲四門ヲ率テ午後五時頃着京シ午後七時半頃ニ至リ海兵三百余人公使ヲ護衛シ当地ニ來着致候当日ハ前夜來ノ降雨ニテ道路惡シカリシカ為メ斯ク延着と相成且ツ予定ノ兵員ハ三百人ニシテ諸事之と相応スル尤ノ準備ヲ致置候兩軍隊四百二十人ニ増シ候ノミナラス其外二人夫等百余人ヲ増シ合計五百余人落暮一時ニ着京致候次第ニ付諸般ノ準備總ヘテ不足勝トナリ一時ハ非常ノ混雜ヲ極メ候ヘトモ翌日ニ至レハ一切整頓ヲ告クルト相成候又右海兵者昨十二日陸軍兵着仁本日入京スヘシトノ趣ニテ本日午後五時当地出發帰任ノ途ニ就キ候尤モ其内半小隊ハ陸軍兵ト交代ノ為今尚ホ滯京致居候

右及具報候敬具

明治廿七年六月十三日在京城

二等領事内田定槌<sup>(註8)</sup> 印

外務次官林董殿

(註1) 右欄外に朱印。

(註2) 同上。

(註3) 「原敬」と刻られた通商局長原敬の朱印。

(註4) 政務局長栗野慎一郎の朱筆による自署と「中田敬義」と刻られた秘書課長中田敬義の朱印。

(註5) 本文第一行目に朱筆。

(註6) 朱印であるが、番号数字のみ朱筆。

(註7) 上欄外に朱印、「林董」と刻られた林外務次官の朱印。

(註8) 「在京城日本帝国領事」と刻られた朱印。

論

説

杉村臨時代理公使が派遣軍受入れの統括責任者として出納官吏の任をも担っていたが、実はその実務は内田二等領事が担当していた。内田によると、本省からの訓令を受けた杉村の指示により、三〇〇名の兵員を三ヶ月間受入れるための宿舎・食糧・雑器具を準備するとともに、居留民惣代と二三の重なる居留民、消防組、人足を集めていた。一方派遣軍は、先発士官が六月一〇日午後二時半頃に着京し、野砲四門を率いた一隊が午後五時頃水路より龍山に到着、主力部隊の海兵三〇〇余名を率いた大島公使一行が午後七時半頃着京した。だが、内田領事等の受入れは派遣軍の延着に加え、予定の三〇〇名が四二〇名に増し、更に人夫等を加えて五〇〇余名となっていたことから、「諸般ノ

準備総へテ不足勝トナリ一時ハ非常ノ混雜」をきたし、翌一日になってやっと落着くといった状態であった。派遣兵員が予定の一・四倍に増大していたことは、現地の受入れ実務を担当した内田領事を慌てさせ、大きな混乱をまねくこととなったのである。

この内田領事報告書には、第一次出兵の実態を知るためのきわめて重要な内容が記されていた。第一に、京城では大島公使を乗せた八重山艦が仁川に着港した六月九日の午後八時頃に仁川より齎された電報においても、大島公使護衛の海兵は三〇〇名であると伝えてきていたこと、第二に、派遣軍受入れ準備の予定は三〇〇名程度の海兵と三ヶ月間の滞在(但し、海兵との限定はない)であったこと、第三に、陸路からの派遣軍は大島公使の直衛が三〇〇名で、野砲隊は水路を利用して龍山より上陸したもので、本隊とは別行動であり且つ先発將校の一团があったこと、第四に、着京してみたら兵員は四二〇名に増え、これに人夫が加えられて総計五〇〇余名と予定の一・六倍以上になっていたこと、第五に、予定外の大量増員により全ての準備が不足勝となっていたこと等である。

ここで派遣兵員数の問題について考えてみると、右の第一にあるように大島公使が着仁した頃の段階でも、仁川よりの電報では入京兵力は三〇〇名とされていたことであり、仁川碇泊艦艇より予定以上の兵力割愛によって海軍省が計画した兵力数を大幅に上まわる陸戦隊の編成がなされたことがわかる。つまり、海軍省も外務省もかくもの規模の陸戦隊が編成出来るとは全く想像していなかったといえよう。杉村臨時代理公使が朝鮮政府と袁世凱に日本軍派遣を通知したのは六月六日であったが、その際は巡査二〇名の引率の事を洩したにとどまっていた。そして、同八日外務督弁に面謁して六月六日発陸奥外相電訓(前掲)に従って日本軍の派遣を通知したが、陸奥外相よりの「兵数ヲバ穩シ置クベシトノ電信」<sup>(35)</sup>に従って派遣兵数は朝鮮政府に通知しなかった。朝鮮政府へ派遣兵数を知せたのは翌九日であったが、その数は三〇〇名であった。<sup>(36)</sup>在京城日本公使館が六月九日の段階で知り得ていた派遣軍の規模は、鋭く迄も



三〇〇名余であるが、それは内田領事報告にもあるように仁川よりの電報によって陸奥外相からの情報を裏付けたものにほかならない。内田領事のいう仁川よりの電報の発信人は不明であるが、仁川で派遣軍の受入れを担当した能勢仁川領事ではなかったかと考えられる。

仁川では第二次派遣軍たる混成旅団第九旅団先遣隊の第一一聯隊第一大隊及び工兵小隊を迎えるのに、仁川居留民惣代佐藤一景が「大熱心ヲ以テ軍隊ノ為メニ奔走」<sup>(37)</sup>したことにみられるように、京城のみならず仁川においても居留民を動員して派遣軍の受入れ準備を行っていたものと考えられる。この統括は、当然仁川総領事館であったとみられることから、大島公使より能勢領事に対し派遣軍の規模が通知されたと考えるべきであろう。もっとも、第二次派遣軍が京城に入った際、京城居留日本人の軍隊への対応は決して好感をもったものではなく、第一一聯隊第一大隊長一戸兵衛陸軍少佐をして「居留人民ノ兵士ニ接スル稍冷淡ナルカ如シ」<sup>(38)</sup>といったあり様であった。佐藤一景のような居留民の一部には派遣軍を積極的に支援する向もあったが、特に京城では日本人居留地の大半が派遣軍によって占められ、更に居留民の家屋の多くが宿舎に当てられていたこともあり、居留民のなかでかなりの不満が出ていたことがうかがえよう。この時の朝鮮在留日本人の正確な数は不明であるが、『日清戦争実記』によると男五、一二二人、女三、七一人で合計八、八五人、総戸数が一、四〇七戸（但し、京城と元山を除く）であったとされており、この内京城には男四九八人、女三二五人の計八二三人（戸数不詳、明治二六年一二月末日）が、仁川には男が一、五四三人で女が一、〇二二人の計二、五六四人がおり、戸数が四二七戸（明治二七年四月末）<sup>(39)</sup>であったことからみても、在留日本人に依存した派遣軍の受入れにはかなりの無理があったものといえる。第一次出兵時の資料がないので確かなことはわからないが、第3表に掲げた第二次派遣軍の資料よりみてみると、六月一六日現在の仁川港居留地での宿舎割では総人員三、〇二二人に対して総畳数が二、八五八枚、一人当りの畳数が〇・九五枚であった。なかでも、歩兵の〇・九〇

第3表 仁川港居留地舎営割

科別	人員数	畳数	一人当りの畳数
歩兵	二、〇七二人	一、八七二枚	〇・九〇枚
騎兵	一一〇人	一三〇枚	一・一八枚
砲兵	二七一人	二八九枚	一・〇六枚
工兵	二五二人	二五三枚	一・〇〇枚
輜重兵	八四人	八八枚	一・〇五枚
野戦病院	一六九人	一六八枚	〇・九九枚
兵站部	五四人	五八枚	一・〇七枚
合計	三、〇一二人	二、八五八枚	〇・九五枚

出典 「混成第九旅団第五師団報告」

人当りの畳数が〇・六六以下と仁川での歩兵の〇・九〇に比べ更に悪化していたことを示していた。

兵士のおかれた劣悪な環境は決して宿舎だけではなかった。これも一戸少佐率下の部隊の場合であるが、六月一二日午後四時仁川に上陸した後、翌一三日午前四時仁川を立てて同日入京したが（入京兵力は、九岷山の停止監視哨の將校以下下士卒三〇名・大小行李や縦列用品輸送と龍山に設けた仮倉庫衛兵のための下士卒若干と輸卒二〇名・龍山に留めて架橋と倉庫の衛兵及び渡場占領のための半中隊・派出司令部衛兵としての上等兵一名と下士卒九名を除いて、約八〇〇余名）、一戸部隊が仁川から京城に入り滞京一日間の間における患者数は、次の表の通りとなっていた。

枚や野戦病院の〇・九九枚は、かなり厳しい条件であったといえよう。全体の六八・八%を占める歩兵の居住環境の劣悪さは、日本軍の体質的な欠陥を露呈するものでもある。

かかる劣悪的居住環境は、京城ではより厳しい状況となっていた。一戸少佐は前掲の京城日本人居留地内において記した報告書のなかで、「宿舎ノ景況日本人居留地内ニ狭縮ナル舎営ヲ為ス即チ全家屋ヲ応用スルモ概ネ一坪ニ付三人以上ノ割合ニシテ土間板間等ニ起臥スルモノ約五分ノ一アリ但シ板間等ニ席類ヲ敷カントシ着後盡力スルモ猶ホ未タ調ハサルノ実況ナリ」と述べているが、これは、京城での一

第4表 一戸部隊患者数

総計	六月一四日現在							行軍途上			区分
	小計	輸卒	工兵	予備役卒	予備役兵	兵卒	下士	小計	兵卒	上等兵	
4	2				2			2	1	1	一等患者
8.3	7.1							10.0			
33	16							17			二等患者
68.8	57.1	3	3	4	4	1	1	85.0	11	6	
11	10							1			三等患者
22.9	35.7			9	1			5.0			
48	28 (註2)	3	3	13	7	1	1	20 (註1)	13	7	計
100	58.3	10.7	10.7	46.4	25.0	3.6	3.6	41.7	65.0	35.0	

(註1) 患者中熱中病13名、靴傷3名、胃急性加答児3名、腓腸筋痙攣1名。  
 (註2) 患者中気管支加答児1名、腓腸痙攣1名、尿管加答児4名、靴傷4名、熱中病11名、胃加答児1名、下肢潰瘍2名、癰2名、腸加答児1名、結膜加答児1名。

出典：「混成第九旅団第五師団報告」但し、表中点線下%

第4表より、行軍途中で二名の一等患者と一七名の二等患者を出し、六月一四日現在では一等患者四名、二等患者三三名を出していたことがわかる。なかでも行軍途中で四一・七%の患者を出していたことは、仁川・京城間の行程がかなり厳しいものであったことを示しており、海軍陸戦隊の行軍をみる時かなり参考になるものといえる。ここで注目しなければならないのは、兵卒と予備役兵卒の患者が合せて二七名と全体の五六・三%を占めていたことであり、且つ、六月一四日では予備役兵卒が二〇名と七一・四%を占めていたことであろう。それは、四八名中の四一・七%に当り、出征軍中の予備役兵卒の罹病率が如何に高いものであったかを示すものでもある。従軍兵士に対する衛生管理は、決して充分とはいえなかった。まして、海軍陸戦隊の場合、本来が艦船勤務者であった者から急遽抜擢編成して陸上勤務させたことや、前夜来の悪天候により仁川・京城間の八里の距離を進撃するのにかなりの時間を費していたことから、一戸部隊以上に罹病率は高かったものと推察されよう。いず

れにもせよ、本省や仁川から不正確な情報をもたらされていたことによる現地の混乱は派遣軍兵士に過度の苦痛を強いることとなった。杉村臨時代理公使も、六月七日統理衙門へ赴き日本軍の出兵に付いて朝鮮政府へ通告せんとした後で、「帰館後兵員待受ノ準備ニ忙ク其夜ヲ打明シタリ」<sup>(4)</sup>したが、結局は本国よりの誤った情報や準備期間の短さ等によって充分なる準備は出来ずに終ってしまった。

陸奥外相が外務省出先機関に派遣兵員数を伝えたのは、外交行動の一つとして朝鮮政府及び袁世凱への出兵通知の際の情報提供という目的によるものではあるが、他方派遣軍を受入れることとなる京城の公使館・領事館や仁川領事館に事前準備を充分にさせるためでもあった。このことは、朴氏の主張する陸奥外相が訓令内容に意図的に虚偽の事項を挿入したとする論理の根拠を否定するものであろう。朝鮮出兵事件から日朝開戦・日清戦争へと発展するなかで、外務省の本省出先機関の在外公使館・領事館の関係は後の戦争にみられるようなものではなく、外相乃至本省のかなり強い主導性の基で統制された外交指導によって維持されていたとみるべきであらう。陸奥外相は、杉村臨時代理公使へ意図的に虚偽の内容をもった訓令を発したわけではなかったし、その必要性もまた全くなかった。それのみか、陸奥外相等から齎された誤った情報がその目的に反して却って派遣軍を混乱させ、派遣軍兵士を過酷な劣悪的条件下にさらさせる結果をまねくこととなったのであった。

〔註〕

- (1) 西郷従道海相宛明治二十七年六月六日発遣陸奥宗光外相回答書、外務省用議案起草用茶野線用紙一枚に墨書、「東学党変乱ノ際日清両国韓国へ出兵雜件」、外務省外交史料館蔵。
- (2) 『日本外交文書』第二七卷第二冊、第五一三文書、前掲。
- (3) 陸奥宗光外相宛明治二十七年六月八日午前一〇時四〇分京城発・同九日午前一〇時一七分接受杉村濬臨時代理公使電報、電報

文用横二〇行青野線洋紙一枚に黒インクペン書、「東学党変乱ノ際日清両国韓国へ出兵雜件」前掲。

- (4) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月九日午後二時四〇分仁川発・同日午後九時三〇分接受能勢辰五郎二等領事第二一五号電報、電報文用横二〇行青野線洋紙一枚に黒インクペン書、同上。

- (5) 西郷従道海相宛明治二七年六月九日發遣陸奥宗光外相回答書、外務省用議案起草用濃茶野線紙一枚に墨書、同上。

- (6) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月九日付西郷従道海相回答書、海軍用一三行茶野紙一枚に墨書、同上。

- (7) 杉村濬臨時代理公使宛明治二七年六月九日發陸奥宗光外相電報。但し、發電時間の記載はない。電報文用横二〇行青野線洋紙一枚に黒インクペン書、電送第一七九号。尚、本電文には陸奥外相の「光」と記した自署と、林外務次官の「林董」と刻られた朱印が捺印されている。同上。

- (8) 杉村濬臨時代理公使宛明治二七年六月九日發陸奥宗光外相電報。但し、發電時間の記載はない。電報文用横二〇行青野線洋紙一枚に黒インクペン書、電送第一八〇号。尚、本電文には陸外相の「光」と記した自署と林外務次官の朱印、栗野政務局長の「栗野慎一郎」と刻られた朱印がそれぞれ捺印されている。同上。

- (9) 『明治二十七八年日清戦史』第一卷、一二二頁、前掲。

- (10) 同上、附録第七ノ一。

- (11) 同上、一二〇頁、一二二頁。

- (12) 同上、六七頁。

- (13) 同上、一二二頁。

- (14) 同上、六七頁。

- (15) 同上、附録第八ノ甲。

- (16) 「混成第九旅団報告」、六月二二日ノ条、伊東司令長官の伝言、前掲。

- (17) 同上、上原少佐よりの報告。

- (18) 同上、渡辺大尉との交渉経過報告。

- (19) 六月四日～八日までの間における清国陸軍・清国海軍・清国領事等の清国軍及び清国政府の動向にかかわる情報としては、陸奥外相宛六月四日發伊集院彦吉芝罘領事電報・同京城發杉村臨時代理公使電報・同北京發小村寿太郎北京駐劄臨時代理公使

電報、同六月五日天津発荒川已次天津領事電報・同仁川発能勢辰五郎仁川領事電報・同天津発荒川領事電報、同六月六日京城発杉村臨時代理公使電報二通、同六月七日発天津荒川領事電報・同京城発杉村電報、同六月八日上海発大越成徳上海総領事電報二通がある（「東学党変乱ノ際日清兩國韓国へ出兵雜件」、前掲。尚、一部は『日本外交文書』第二七卷第二冊に収録されている）。

(20) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月九日午後一時二五分京城発・同日午後九時二五分接受杉村濬電報、電受第二一三号、電報文用二〇行青罫線用紙一枚に黒インクペン書、同上。

(21) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月九日午前八時仁川発・同日午後九時三〇分接受能勢辰五郎仁川領事電報、電受第二一四号、電報文用二〇行横青罫線洋紙一枚に黒インクペン書、同上。

(22) 「<sup>六月九日</sup>京城森名ヨリ盛道台ニ来リシ電報」<sup>日</sup>「朝鮮徐相喬ノ来電」<sup>日</sup>「<sup>六月九日</sup>李鴻章ノ幕僚タル盛道台ヨリ葉提督ニ送リシ電文」<sup>日</sup>「同上盛道台ヨリ袁公使ニ送リタル電文」（雁皮紙二枚に黒インクペン書、同上）。

(23) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月一日午前十一時五〇分仁川発・同日午後九時三五分接受能勢仁川領事電報、電受第二二五号、電報文用二〇行横青罫線洋紙一枚に黒インクペン書、同上。

(24) 陸奥宗光外相宛明治二七年六月一日午後六時四五分北京発・同日午後二時一九分接受小村寿太郎電報、電受第二二六号、電報文用二〇行横青罫線洋紙一枚に黒インクペン書、同上。

(25) 『明治廿七八年在韓苦心録』、八頁、前掲。

(26) 『日清戦争実記』第一編、三九頁、前掲。

(27) 『明治二十七八年日清戦史』第一卷、一二二頁、前掲。

(28) 『日本外交文書』第二七卷第二冊、第五三〇文書、前掲。

(29) 「混成第九旅団報告」、六月一二日の条、前掲。

(30) 『日清戦争実記』第一編、三九頁、四〇頁、前掲。

(31) 同上、三九頁。

(32) 在朝鮮国京城日本領事館用濃茶一三×二行罫紙二枚に墨書、「東学党変乱ノ際韓国保護ニ関スル日清交渉關係一件」、第一卷、外務省外交史料館蔵。

- (33) 『明治廿七八年在韓苦心録』、六頁、七頁、前掲。
- (34) 『日本外交文書』第二七卷第二冊、第五二三文書、前掲。
- (35) 『明治廿七八年在韓苦心録』、七頁、前掲。
- (36) 『旧韓国外交文書』第二卷・日案2、第二八三六文書、前掲。
- (37) 『混成第九旅団報告』、六月一三日の条、前掲。
- (38) 同上、六月一五日前八時四〇分京城日本居留地内よりの一戸兵衛少佐報告。
- (39) 『日清戦争実記』第一編、一〇〇頁、前掲。
- (40) 『混成第九旅団報告』、六月一五日の条、前掲。
- (41) 『明治廿七八年在韓苦心録』、七頁、前掲。

## 結

日清戦争の前史となる朝鮮出兵事件の、それも端緒となる第一次出兵事件は、陸奥外相が帰任する大鳥公使に対して発した訓令そのものから、大きな矛盾を含んだものであった。なかでも、大鳥公使宛訓令の中で最大の矛盾は、大鳥公使自らが出兵の直接の实行者でありその当事者でもあった点である。軍事的理由から出兵計画を変更して急遽派遣せられることとなった海軍は、その緊急性故に不十分なる状況下で多くの困難にあらうこととなるが、その原因の基は出兵政策指導そのものにあった。それは、政策目的の曖昧さの他に、政略指導者内部の意思の不統一性や、発生する事態への即応性の欠如を欠陥として包含する国軍の実状と、兵士の人間性を軽視し兵士を酷使して一つの駒的なものとしてしか位置付けていない国軍の体質とによるものであるにはかならない。

大鳥公使への訓令が、出兵政策の公式的・基本的方針を明記したものであったとはいえ、訓令文の内容が明らかに既に失効していたものを含めていたことは、出兵政策指導そのものに混乱があったことを示している。それは、政策

案そのものが熟慮しきれていないことを示すとともに、急速な事態の進行に指導者内部が必ずしも対応しきれていなかったことをも物語っている。

従来の日清戦争史研究において共通する、政戦略指導や軍備への過大評価は、かかる実態を理解する上で大きな妨げともなっている。これらは、日本の政戦略指導者の侵略主義的性格を証明することにはなっても、そこに含まれる彼らの冒險主義的侵略主義を明らかにすることは出来ない。派遣する兵士の待遇や受入れ体制の不完全さは、国軍と称した日本軍の実態や兵士を軽視する体質、戦略的要求を先行させて戦力そのものの実状を軽視する思想、を具体的に示す事例であったといえよう。日清戦争を、周到に準備された戦争であるとする論理は、かかる政略側のみならず戦略側の実態にも相合しない単なる幻想による過大評価にすぎない。それは、戦略的要求を先行させて軍内部の実状を軽視しながら兵士を酷使する軍の体質的実態を、論理的に追認するものであるのみか、日本を無意識的に大国主義的・強国主義的幻想のなかでとらえるものでしかない。日清戦争で日本が軍事的に勝利したのは、飽く迄も偶然的結果にすぎず、この偶然的結果を前提としてその初動を評価するのは、論理的に逆転したものといえよう。出兵政策の混乱は、決して日本の朝鮮侵略を正当化乃至否定するものではなく、明治初年以來の朝鮮への侵略的欲望の具体化の段階における情勢判断の相違における政略内部の不統一性と、国軍が参謀本部の設置や師団制創設以降の対外戦的体制をもちながらもその内実の不完全さと緊急的事態への即応体制の弱さによるものであった。これらの問題が、集約的に現象化したのが第一次出兵事件にほかならない。それ故、日清戦争史研究にとってはまず最初にかかる第一次出兵事件を基本的な問題として正確に掌握しなければならない。

朴氏が虚偽通告論の一つとして指摘した出兵兵員数通告問題は、外交的側面や国際法的側面に於いてある程度は評価できるものであった。然し、朴氏の論理がこの領域に限定されることなく肥大化して、日本の出兵政策指導や七



・二三事件に対する評価へと発展させて展開していくところに、氏の基本的な誤りがあったといえよう。朴氏の論理に従うならば、三〇〇名と通告した後に正確な実数が判明した段階で訂正通告をすべきであるということになるのだろうか。然し、日朝間における外交交渉の焦点は兵員の数量にあったのではなく、兵員数の如何にかかわらず日本軍の派遣そのものに対して撤兵を要求する朝鮮政府側と、飽く迄も出兵した以上朝鮮への駐兵を維持し更に増派せんとする日本側との対立に争点が集中していたように思われる。つまり、出兵兵数の訂正通告は日朝間交渉において左程重要な課題とはなっていない。朝鮮政府にすれば、日本軍が自国の領土内に侵入していること自体が重要なものであって、その兵数が問題であったわけではない。朴氏は、日朝政府間の外交交渉経過を正確にとらえておく必要があったのではないか。

まして、杉村臨時代理公使が趙督弁に通告したのは陸奥外相の訓令によるものだけではなく、仁川からの情報にもよるものであった。本国政府や海軍にとって、現地出先機関に派遣軍の受入れを準備させる以上は正確な実数を通報すべきであって、派遣軍経費の前渡官吏に任せられた杉村臨時代理公使にまで虚偽の情報を提供する政略的・戦略的理由は存在しない。朝鮮放府を欺くために杉村臨時代理公使まで欺いたとする論理は、あまりに衝動的・戯曲的なものにすぎない。朴氏は、日本の政戦略指導の問題にまで立入って論求している以上、かかる政略的指導者内部の問題を深く且つ正確に掌握すべきであり、冷静に分析していく必要があった。

陸奥外相は、西郷海相との会談や西郷海相からの通牒に従って杉村臨時代理公使へ通知したが、そこでは派遣兵員数を実際の数より過少に通知するという誤りをおかした。これに基づいた杉村臨時代理公使への誤報は、大鳥公使一行が仁川に着港した直後に仁川より発せられた情報にも共通していた。このことは、海軍陸戦隊を率いることとなる大鳥公使自らが誤っていたことを意味するとともに、八重山艦の着仁の段階では完全に陸戦隊の編成とその掌握が出来

ていなかったことをも意味していた。伊東司令長官をはじめとして、仁川に集結した各艦の艦長すら、拔擢できる陸戦隊要員を事前に正確に把握しきれてはいなかった。詰り、大島公使や伊東司令長官には、実際に陸戦隊が揚陸されて一部隊として編成され出発する寸前までの間は、ほとんど派遣部隊について正確な情報を持ち得ていなかったとみるべきであろう。更に、この部隊が最少四つの隊に分けられていた（先発将校・大島直衛の本隊・漢江から入京した野砲隊・九岷山に駐留した小隊）ことも、その混乱をまねいた原因であったろう。

こうしたなかで、派遣軍を受入れることとなる京城公・領事館では、誤った情報を基にその準備に入ったことや、協力を求める居留民に対してもごく一部の限定された数名に限って情報を提供していたことから、その対応には海軍省が最も懸念していた「不都合無之様」が現実の問題となってしまった。仁川と京城間約八里の行程を前夜来の雨泥のなかで強行行軍していることから、罹病者の数も増大していたであろうし、入京後の混乱や宿舎の狭さは多くの兵士を苦しめる結果となった。こうした、兵士の待遇にかかわる問題は、後続の第二次出兵となる一戸兵衛率下の混成旅団先遣部隊の派遣までに改善されることはなく、後々まで影響することとなる。

第一次朝鮮出兵事件は、日本の政戦略指導の杜撰さを露呈するものであったとともに、確固たる政戦略論の欠如のなかで事態のみを先行させていく伊藤内閣の冒険主義的指導の実態を象徴するものであった。時局の先行は、朝鮮出兵事件の第二段階である駐兵問題の発生を必然化させるものであったといえよう。